



館
か
お
る

フランスの社会史家フィリップ・アリエスは、今春来日を目前にして逝去した。言葉をかわす機会を持ち得たことを思うと残念でならない。アリエスの一九六〇年の

著作『アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』が、『へ子供』の誕生』（杉山光信・恵美子訳 みすず書房）

として邦訳されたのは、一九八〇年のことであった。そしていまや「子供の誕生」は歴史概念として確立しつつある。

アリエスが問題にしたのは、十七・八世紀において生じた、大人の子供期へのまなざしであった。子供にむけ

られたこのまなざしは、子供期の「学校化」を導くことにつながっていく。即ち子供を学校で教育することが一般的なことであり、権利であり義務でもあるとする、いわゆる近代公教育制度が開始されることになるのである。欧米先進諸国に共通なこの歴史的な流れに日本もさほど遅れをとっていない。むしろ日本の近代化は、この学校教育を核として推進されたのである。日本では明治教学体制と呼ばれるこの期の教育が、画一的で詰め込み主義であると批判され、公教育への問い直しが行なわれるのは、大正デモクラシーという時代においてであった。この期におけるこうした教育への問いかけは、日本に固有のものではなく、欧米先進諸国と共通の一つの時代精神であった。その時代精神を、私たちは、エレン・ケイが一九〇〇年に刊行したその書名にちなんで、「児童の世紀」と呼んでいる。十八世紀に「誕生」させられた子供は、近代公教育の名のもとに学校に囲いこまれた。その子供たちの「誕生」を子供たちにとって祝福すべきものとして把え直し、呪縛から解放し、さらには歴

史の未来を子供に託そうとするものが「児童の世紀」の示すところであった。またその時代精神は、同時に従来の教育を旧教育として葬り去り、子供を生かす新しい教育の力を信じる「教育の世紀」と称するものでもあった。

一九二〇年代から三〇年代の日本の都市新中間層を中心とするこうした時代精神の一つの成立形態が「児童の村」であった。ここに紹介する宇佐美承『椎の木学校——「児童の村」物語』（新潮社、一九八三年）は、この「児童の村」の実態を、資料に忠実に生き生きと描きだしてくれている。

「児童の村」は、教育を通じて社会の改造を行おうとする結社、「教育の世紀社」の実験学校としてまず東京の池袋、神戸の御影（のち芦屋）、神奈川の茅が崎に設立された。教育の世紀社の教育精神には、個々の児童が尊重され、人類の文化を発達せしむることが高らかに宣言されている。「新しき村」など理想社会追求の試みもまた同時代のものであったが、教育の世紀社及び「児童の村」

の特色は、来たるべき社会の中心を「児童」においていたことにある。子供を中心とする教育共同体創出の試みは、特に池袋児童の村小学校において徹底的に展開される。一九二四年に開校し、一九三六年に閉校したこの「児童の村」は、高く評価されながらも、その実態は必ずしも明らかではなかった。宇佐美氏は、子供たちの文集や作品、聞き書きをもとにして、教師たちの日誌や実践記録などを丁寧に構成し、子供や教師たちの肉声が伝わってくるように再現した。特に初期の頃、すべての規制をとりはらわれた子供たちが、混沌としたカオスの中から、「原始子ども」として立ち現われる経緯は興味深い。「児童の村」の子供たちには、教師を選ぶ自由、時間割を選ぶ自由、場所を選ぶ自由があった。学校における規制をとりはらわれた子供たちは、決して勉強などはしない。徹底的に遊びだす。いつか勉強したくなるだろうという教師の期待を裏切って約一学期の間は遊び続ける。そこに表われた子供たちの生命の躍動は、次に生まれ出るものの子感に満ちていて魅力的である。穴を掘り続け原始

人のように穴居生活を始める。穴の中に水をくみ入れ、おぼれる子供もいたりする。そのうち人類の祖先がこのような暮し方をしていたのを聞くと、今度は猛然と本を読み始める。書き始める。バラバラに仕入れた自分の知識をまとめるために教師の講義を聞きたがるようになる。旅行の計画は子供たちでたてて、夜の催物はすべて準備してから教師や父母を呼びにくるといった行動がでてくる。だが、昼食にそば屋の出前を頼む子がいたことは、やはり「児童の村」らしいところであろう。

教師たちも子供たちを導くという指導者意識にたつ時、子供はその生命をゆがめられることを知る。教育というものは、教師が子供とともに生きることだと考えるようになり、教師は子供に文化を伝達するが、それは子供が次の文化を形成するためのものであることに心をくだく。このように教育の世紀社の「児童の村」を形成しようとする思想は、池袋児童の村小学校の教師と子供、父母たちによって、観念としてではなく、その実態となって創出されていったのである。

子供たちの発達に大人たちが懸命に心を傾けた時代があり、そこで何を見出すことができたのかを私たちは、今日再び考えてみなければなるまい。また一方で、「児童の村」は、時代精神を体现する傑出した数少ない学校であったことも私たちは思い返さねばならない。

多くの子供たちは、社会・学校・家族のかかえる矛盾の中で、その子供期を過ごしたのである。「児童の世紀」という時代精神は、必ずしもその時代の子供たちのすべての生活に反映するものではなかった。

青蛙房刊の「シリーズ大正っ子」は、そうした意味で「児童の世紀」の子供たちの様々な生活を知ることができる好著である。主に大正期に東京で子供期をおくった人々がその時代を回想して書いていて、すでに次のものが刊行されている。鹿島孝二『大正の下谷っ子』、村上信彦『大正・根岸の空』、岸井良衛『大正の築地っ子』、玉川一郎『大正・本郷の子』、多賀義勝『大正の銀座赤坂』、藤田佳世『大正・渋谷道玄坂』、波木井皓三『大正・吉原私記』、森岩雄『大正の雑司ヶ谷』、岩野喜久代

『大正・三輪浄閑寺』、北園孝吉『大正・日本橋本町』。大正という同時代、東京という同空間に子供期をおくった人々でも、下町・山手という地域性や、親の職業及び生活意識の違い、学校という場に対する子供、教師の意識のちがいが際立ったり、重なりあったりしており、私たちはその中から様々なものを受け止めることができるであろう。

現代は教育荒廃といわれて久しく、子供たちには病理現象となって表われている。いま私たちに必要なことは、アリエスが意図したように、歴史の中の子供や大人の心性を呼び起こし、現代に生きる子供たちを感じる、感性を持ち得ることではないかと思われる。

(お茶の水女子大学女性文化資料館)